演技派(笑)一夏くんと腹黒(ガチ)箒ちゃん

笛吹き男

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

原作の行動が、全て演技だとしたら？

※この作品は、原作の登場人物達の「言動をそのままに、内面だけを変えた」ものです。

目次

【序】仮面を被る者たち
【起】クラスメイトは全員間者 ―― 1
【承】クラス内人間関係決定戦！ ―― 19

【序】仮面を被る者たち

【起】クラスメイトは全員間者

0

篠ノ之束（しののたばね）が親しくする人間は三人とされている。自身の妹と、自身の親友と、その親友の弟。彼らには当然、世界の監視がつく。子供でも分かる理屈だ。だから織斑一夏（おりむらいちか）は仮面を被る。『織斑一夏』という道化を演じる。全ては、束を守るために。なぜなら束こそが、一夏の初恋の相手なのだから。

1

十年前、この世界に女性にしか操作できない究極のパワード・スーツ、『インフィニット・ストラトス』、通称『ＩＳ』が発表された。一斉コンピューターハッキングを受けた世界各国の軍事基地から、日本に向けて放たれた２３４１発ものミサイルを全て駆逐した謎の兵器として世間に知れ渡ったＩＳは、その存在が公になるやいなや、瞬く間に世間を圧巻した。現行の科学兵器を何世代も先行する最強の兵器。唯一の欠陥、「女性にしか扱えない」という特徴を持つものの、ＩＳは世界の軍事バランスを変え、女性はその地位を大幅に向上させた。世界はＩＳが支配する。それが世界の常識となった――――――わけがない。

ＩＳには心臓部としてＩＳコアが必要となる。しかしこのＩＳコアは束が制作したとされる４６７個しか存在せず、各国は複製はおろか解析すら満足にできていない。ＩＳコアは全てがブラックボックスと化しており、手探りで利用している現状だ。そんな状態でＩＳを国防の要にすることなど、できるはずがなかった。

束はＩＳ発表時、デモンストレーションとして利用するために、世界各国の軍事基地をハッキングした。そう思われている。ならば当然、ＩＳコアのハッキングも可能だと考えるのが道理。ＩＳに国をも

任せるなど、束に国を差し出しているのと変わらない。しかし、ＩＳの力は魅力的過ぎた。この力を完全にコントロールできるようになれば、世界最強の兵器を自国だけが手にすることになるのだ。

そして何より、束はＩＳを兵器として世界に知らしめた。ＩＳが兵器として評価されることを束は望んでいる、と考えられる。だからこそ各国は、ＩＳが国を守るかのように宣伝した。『天災』と呼ばれる束の矛先が自国に向くことを恐れて。

そう、世界は一度、篠ノ之束に敗れた。

しかし、ただでは転ばない。束と対等の関係であると目される『最強』こと織斑千冬をＩＳ学園に縛ることに成功した。千冬だけではない。束の妹である篠ノ之箒も、千冬の弟である一夏も、ＩＳ学園に縛られる存在となった。ＩＳ学園は檻だ。物理的な物ではないが、帰属することで精神を縛る檻。束に対するジョーカー。

確かに束一人なら、世界と戦えるだろう。しかし、足手まといを抱えながら抵抗できるほど、世界は優しくない。それが分かっているからこそ、束は一人で姿を晦ました。

束と世界。互いが互いの急所に銃を突きつけ合う。だが平和は保たれていた。

束はＩＳコアをハッキングするようなことはせず、世界も件の三人を攻撃することはなかった。

裏でどれだけ駆け引きが行われていようとも、表向き世界は今日も平和だった。

兵器であるＩＳが競技の道具として使われるくらいには。

2

「あー、君、受験生だよね。はい、向こうで着替えて。時間押してるから――――」

藍越学園の受験会場で、いや、ＩＳ学園の受験会場でＩＳを目の前にしてもなお、一夏は自分がＩＳを起動できるのか半信半疑なところがあった。

織斑一夏、十五歳。高めの伸長に爽やかな笑みが似合う、アイドル系男子。表向き女尊男卑が広がる今の世では、女受けする部類と言える。姉ともども整った顔立ちを持ち、これまた姉と同様に運動神経も優れている、まさに優良物件。一夏に思いを寄せる女子は数知れず。しかしそんな一夏に告白をした者は、たった一人しか存在しない。何故なら高嶺の花だからだ。世界を揺るがすＩＳを作り上げた束が心を許す、たった三人の身内。一夏はそう内の一人だ。中学校当時の同級生達にとって一夏は言うならば、校長先生が朝礼でわざわざ「私の親友です」と紹介した事故物件のようなものだ。アイドルとして愛でることはあっても、付き合うとなると理性のストップが掛かる、そういう立場だった。たとえ一夏自身に何ら特別な物がなくとも、束という特別な存在が一夏の後ろに立っている。

そんな一夏も日本の法律ではただの中学三年生。高校進学に向けて受験を行う世間の流れに乗り、連絡を受けた受験会場にやって来ていた。

今一夏がいる場所は、試験会場である多目的ホールの一室。豪勢な扉の奥にあったのは、カーテンで仕切られた小さな控え室。監督の教員が使うのであろう机が一つあるだけの、救護室のような空間。女教員の指示は早口で、到底聞き取れるものではなかった。しかし指でカーテンの奥を示すと、足早に退出してしまったのだ。仕方なしに一夏はカーテンを捲りその奥へと向かった。そして出会ったのだ。世界最強の兵器、インフィニット・ストラトスに。

改めて、一夏は目の前のＩＳを見つめる。束が世に送り出した、全ての始まりたるそれを。

確かに一夏は束の寵愛を受けている自覚がある。束は件の三人を特別な存在だと認識しているようで、束自身と同じ『特別』にしようとする節が昔からあった。その最たる例が、ＩＳ「白騎士」を与えられ『最強』と謳われるようになった姉の千冬だ。箒や一夏にも同様な事をしてくる可能性はあった。

しかし、一夏と他二人ではＩＳを持つ意味が違う。ＩＳは女性にしか使えない。束がそう設定したのか、それとも最初からそうなのかは

知らないが、ともかくＩＳは男性には使えない。そこに男性のＩＳ操縦者が現れればどうなるか。今の均衡を崩してでも一夏の身柄を手に入れようと画策する者が必ず現れる。ただでさえ束の関係者として注目を集める一夏が、より一層危険になるだろう。

だが同時に、一夏がＩＳ学園に行く正当な理由にもなる。現状、千冬がＩＳ学園で教師をしており、箒もＩＳ学園に入学することが決定している以上、一夏も同じ場所にいた方が、束にとって都合がよいのかも知れない。確かにＩＳ学園は一夏達を囲う檻ではあるが、同時に身を守る壁でもある。いくら束でも三人を常に守ることはできないし、できないし、世界としても下手に三人を傷つけて束を刺激したくはない。しかしそうなると、なぜ今になってという疑問も湧いてくる。

結局のところ、一夏には束の意思は把握できなかった。できなかったが、この現状が束によるものだとは理解できていた。

本来なら一夏が受験する予定だった藍越学園とＩＳ学園の受験会場が一緒になることなどありえないし、会場内の案内がないのも不自然だ。周囲に人もおらず、「迷ってください」と言わんばかりの迷路状の通路。そして何よりドアがない。誘導されているかのように、今一夏がいる部屋のドアしか見つからなかったのだ。

事実、誘導されたのだろう。会場にはエレベーターも階段も見当たらず、二階への道はない。一階を奥へと迷うように進めば見えた一本の通路に従った。周りに誰もいないのか、自分の足音がやけに大きく響いたのを覚えている。一面ガラス張りの廊下は、外から観察されているかのように気持ち悪かった。気分はチューブの中を歩かされる実験昆虫。そして唯一見つけた部屋に入る時に入れ違いになった女教員は、一夏の顔を確認せずに指示だけ出して急いで部屋から出て行った。まるで、少しでも厄介ごとから離れたいかのように。

「男には使えないんだよな、たしか」

まるでＩＳなんてよく知らないとでもいう風に、一夏はＩＳに手を伸ばす。勿論、そんなことはない。今の一夏達の現状を生み出した根幹たる存在であるＩＳだ。知らないわけがない。しかし、『織斑一夏』

はＩＳなど知らない方が良いのだ。知らない秘密は吐きようがない。そういうことだ。

だが今、そこにＩＳがある。無骨な鎧の形をした銀灰色のＩＳ『打鉄（うちがね）』が鎮座している。主を待つ家来となって、一夏の前に頭（こうべ）を垂れている。

ここには一夏と『打鉄』しかいない。どこの誰の物とも知らないＩＳ。しかしそのコアは間違いなく束の物。束が世界を敵に回してまで作り上げた、束の魂の分身。

伸ばした手が汗ばむのを感じた。のどが渇き、視界が狭くなる。今だけは、周りの見えない視線も気にしない。この部屋に存在するのは、一夏と目の前のＩＳだけ。広い部屋の中でたった一人、一夏を待っていたＩＳ。照明を浴びて浮かび上がるその巨体は、無言の重圧を放っている。

一夏がＩＳに触れたことはなかった。男である一夏がＩＳに触れる機会などない。ＩＳは兵器だ。いくら『最強』の千冬の弟でも、簡単に触れることはできない。

それが目の前にある。

触れれば、世界が変わるだろう。一夏は『唯一』という名の『特別』になる。千冬の『最強』と同じように、束が定める『特別』になる。

そうだ、と一夏は意を決意する。守られるだけの存在じゃない、束と並んで歩ける、『特別』になるのだと。

改めてＩＳに視線を向ける。

一夏はＩＳを通して束を見た。

両手を広げ、その大きな胸に一夏を抱きしめる束。顔を埋める一夏には、束の表情は見えない。ただ、もの悲し気な、後ろめたさが、束からは漂っていた。思わず一夏は自分から束を抱きしめる。だが、一夏の腕の中で束は霧散した。そこには誰もいない。あるのはＩＳだけだ。

伸ばした手を前に進める。

そして――――『打鉄』に触れた。

「!?」

頭に響く、高い音。鋭く固い、金属質のそれ。頭の先から足の先まで、全身に響き渡るように流れた刺激は、一夏の時を止める。

これがＩＳ。これこそがＩＳ。

流れ込んでくる情報の海に身を任せながら、一夏は歓喜に身を震わす。

『織斑一夏』はＩＳを知らない方が良い。そう考えていたからこそ、一夏はＩＳに関わらないように振舞った。ＩＳは確かに素人が触れられる物ではないが、無理をすれば可能な立場に一夏はいた。それでも、束の重しになりたくないから、『織斑一夏』としてＩＳから離れるようにしていた。

だが一夏にはＩＳが与えられた。他ならぬ、束から与えられたのだ。

だってそうであろう。誰が男の一夏にわざわざＩＳを触らせるのか。それも偶然を装って。件の三人の一人だから念のため確認したいだけなら、いくらでもやり様があるのだ。こんな大掛かりに、劇的に演出する必要はない。そもそも起動しなければどうするのだ。

だからこそこれは、一夏がＩＳを動かせると知っている人間の仕業。束の仕込みに間違いないのだ。

そう、一夏は選ばれたのだ。束の『特別』に。

3

ＩＳ学園とは、日本に作られた、ＩＳ操縦者を始めとしたＩＳ関係者を育成するための高等教育機関とされている。同様の施設は他国にも存在するものの、そのでれもがＩＳ学園には及ばない。またＩＳ学園に関しては、外部組織からの介入を受けない、という一種の独立国として認めるような条例が国際法で定められているため、良き学び舎として世界にその門戸を開いている。もちろん、それは表向きであるが。

裏では各国の密命を受けた少女達が日夜暗躍する策略の世界。他国の介入を受けないとされるＩＳ学園自体も、世界の調整役として何

等かの融通を通さなければならない。
けれども実質ＩＳ学園に送られてくるのは年端もいかない少女達。精神も技量も未熟であり、国を背負うには不完全。そもそも各国がＩＳ学園に見出している価値は社交場としてであり、現実は十代少女達の花の楽園となっている。自国の虎の子は自国で育て、他国との繋ぎ役となる予定の者達をＩＳ学園に送る。これが世界の実情であり、現状であった。
そう、現状。現状である。ＩＳ学園の本来の目的ではない。ＩＳ学園創設の目的は、篠ノ之束の身柄を抑えることであった。各国としては自国に取り込むことが最善であったものの、束をめぐって更なる争いが起こることは必須。だからこそ、お互いをけん制しつつ束を一か所に留めるための場所として、ＩＳ学園を作り上げたのだ。敵国の手に渡るよりは、中立の檻に閉じ込めてしまった方が良い。ＩＳは欲しいが、戦争はしたくない、それが各国の本心であった。
結果として束には逃げられ、ＩＳ学園はその役目を社交場へと変えた。
それから数年後、ＩＳ学園は再び本来の機能を発揮することとなった。織斑千冬の着任と、篠ノ之箒の入学、そして織斑一夏という世界最初の男性ＩＳ操縦者の発見によって。
千冬が教員として赴任し、箒が入学することも決まっているＩＳ学園。そこに送り込まれる各国の少女達に課せられた使命は、「可能ならば件の二人を取り込め」というものだった。あくまで、可能ならば。その程度でしかない。『最強』たる千冬を飼い殺すことができるとは考えられないし、箒の周りは日本政府が固めている。そもそも、千冬の赴任にすら懐疑的であった。なぜ織斑千冬は、自ら檻の中に入ったのかと。
だが世界が納得する事態が起きた。一夏のＩＳ起動である。千冬がＩＳ学園にいるのだ。一夏の身柄がＩＳ学園に渡されることになるのは自明の理。一夏を守るために、千冬がＩＳ学園に入り込んだのだと世界は考えた。
とにかく、織斑一夏、世界最初の男性ＩＳ操縦者である。そう、男

である。
この世で男と女、篭絡しやすいのはどちらかと聞かれれば、それは男だ。なぜなら、男には女にない特徴があるからである。それこそ、勃起に他ならない。
人間を縛る、富、名声、性欲。中でも性欲によって身を亡ぼす人間か数知れず、そして何より血の繋がりを得ることができれば影響力は計り知れない。血縁だけは人間の本能に起因する、生物である以上逃れられない絶対の鎖であるからだ。そしてその性欲を操るのに、勃起ほど明確で分かりやすい指標はない。男は性的に興奮すれば勃起する。他の要因でも勃起するが、性的に興奮すれば間違いなく勃起するのだ。なんと分かりやすいことか。
男を取り込むならば女を使えば良い。一見馬鹿馬鹿しい話に聞こえるが、『天災』を刺激しない名案であった。なぜなら、篠ノ之束は人間性に欠けているからだ。親愛は知れど性愛は知らないとされる束。束の中での織斑一夏という存在は、あくまで自身の親友である織斑千冬の弟である、というのが世界の認識であった。
確かに、件の三人を力づくで取り込むことは難しい。しかし織斑一夏ならば、性欲を刺激し愛情を芽生えさせ、自ら赴くようにしてやればよい。おあつらえ向きに、ＩＳ学園は女子高だ。その中に男が一人放り込まれれば、女の色香に惑わされても不自然さはない。世界の均衡を破ることなく、件の三人のうちの一人を、それも世界最初の男性ＩＳ操縦者を手に入れることができるのだ。やらない手はなかった。
かくして今年度のＩＳ学園入学者だけでなく、在学生にわたる全てのエージェント達に指令が下った。ただ唯一の誤算があるとすれば、彼女達はその道のプロではなかったということだ。一夏の存在が公になった時点で、ＩＳ学園に送る人材は決定してしまっていた。本命の刺客が送られてくるのは、次年度からになる。それまでは、すでにＩＳ学園にいる者達で一夏を篭絡するしかなかった。
そのような事情の中で始まった、ＩＳ学園一年一組の最初のＳＨＲ（ショートホームルーム）。
童顔巨乳の眼鏡教師が、黒板の前で可愛らしく微笑んで挨拶をす

る。一人一人座る生徒達の目は、目の前の副担任と、立体表示される彼女の名前に向けられていた。
「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」
「……」
副担任の山田真耶（やまだまや）の言葉だけが、教室に虚しく響いた。返す者はいない。誰もが緊張していたからだ。少女達は、これから自分の女を使って篭絡しなければならない男を実際にその目にして。一夏は完全なる適地で前門の虎と後門の狼に挟まれて。
少女達にはハニートラップの指令が課せられているとは言え、その道に生きる者ではない。ＩＳ学園に送られる人間は、各国の調整役。国の顔として正攻法のやり方を主として学んできた者だ。知識として知っていても、女を上手く使える人材は限られている。そして調整役として教育を受けてきたが故に、周囲との同調を気にしてしまう。下手に抜け駆けすることも難しい。そして更に意識を割く必要がある存在として、篠ノ之箒という少女がクラスには在籍していた。件の三人の一人。その少女がまるで恋する乙女のように周囲に睨みを利かしているのだ。「私の好きな男に手を出してみろ」とでも言うような剣呑な雰囲気。篠ノ之箒はそういう少女なのかと、クラスメイト達は理解した。だとしても、そこで彼女達が諦めることはない。例え一夏と箒が恋仲になったとしても、そこに入り込めないわけではないのだ。体だけの関係がいつの間にか本命に、ということもあれば、３Ｐや４Ｐといった世界も存在する。そこまでの覚悟がある者は少ないものの、自分達に課せられた使命の重要性は誰もが理解していた。
そんな彼女達の視線を背中に浴びる一夏の座席は、クラスの最前列の中央。教師の顔を見るために向けられた少女達の眼差しは、当然一夏へと刺さることになる。建前と本音の両方の視線を１８０度から浴びる一夏は、まさに針の筵だった。これまでの見えない監視の視線も大概であったが、そこに今度はあからさまな視線が混ざるのだ。それも、周りには例外を除いて敵しかいない状態で。想定以上の精神的苦痛を感じながら、一夏は目の前の難敵に集中する。
「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

あたふたと頼りなさげにホームルームを進めるその姿は、見る者の庇護欲を刺激する。だが真耶は女子ではない。少し低めの伸長に反して育った胸が主張するように、立派な女だった。

十代のような雰囲気を残すその顔には澱みのない笑顔が浮かび、慌ただしく動くその体が胸を弾ませる。無垢の中にある、幼さとそれに反する母性。その姿は、一夏に束を思い起こさせた。もう長いこと、束と直接会っていない一夏は、真耶に束の姿を重ねてみた。

教鞭をとる束の姿。ＩＳ学園が本来求めたあるべき姿。しかしそれは、決して実現しない幻想だ。

「……くん。織斑一夏くんっ」

「は、はいっ!?」

「あっあの、お、大声出しちゃってごめんなさい――――――ご、ゴメんね？　自己紹介してくれるかな？　だ、ダメかな？」

思わず返事に戸惑ってしまった一夏に、真耶は慌てるように言葉を紡ぐ。自信なさげな、見守りたくなる声色。だが一夏は知っていた。この女がかつてＩＳ競技の日本代表候補性だったということを。

ＩＳで戦争をするわけにはいかない各国がＩＳ技術を競う場として始めたＩＳは競技だが、当然その操縦者は実戦でも操縦を担当する。つまり軍人に他ならない。それも代表候補性などエリートの中のエリート。そんな経歴を持つ女が、少年漫画の女新米教師のようなゆるかわ系女子なわけがないのだ。つまり――――

「いや、あの、そんなに謝らなくても――――」

「ほ、本当？　本当ですか？　本当ですね？　や、約束ですよ。絶対ですよ！」

これは演技。間違いない。一夏はそう確信した。

現に真耶は一夏の手を取って詰め寄ってきた。両手で掴むことで、その腕に挟まれた真耶の女の部分が圧迫されて一夏の目の前に曝け出される。明らかに胸を意識した開襟シャツから見えるインナーを見せつける真耶。

これが演技でないはずがない。演技でなければ頭が可笑しい馬鹿女だ。胸の大きい女は周りの視線に敏感になり、行動にも影響が出

る。普通の神経ならば異性の教え子に自分の胸を近づけさせない。一夏の知識ではそういうことになっていた。束と真耶は違うのだ。束が一夏に見せる笑顔と行動は、束が心を許した存在に対しての物だ。一夏と真耶は初対面。そこに愛情が生まれる余地はない。だからこそ、真耶の行動には意図がある。

しかし、演技と分かっていても、一夏は男だ。女の色香の影響は嫌でも受ける。そこに愛情は関係ない。男は嫌いな女でも勃起できるのだ。当然、真耶でも勃起する。

だから勃起しないように、陰茎を足で挟み込む。勿論、一夏の好きな女性は束だ。自分に優しかった年上のお姉さん。それも、姉の親友であり、自分の友人の姉。惚れないわけがない。しかしこれとそれとは別だ。人よりは性欲のコントロールができると自負する一夏だが、万が一にも勃起するわけにはいかない。念には念を入れる。

そもそもこれから起立して自己紹介をするのだ。勃起したら絶対に分かる。これから三年間女子高の中で過ごすためには、裏はともかく表向きは紳士でなくてはいけない。ハニートラップとか以前に、クラス唯一の男として勃起するわけにはいかなかった。

少しでも陰茎が反応したらバレる。緊張が一夏を駆け抜ける。世の中には見られると思うと興奮する人種もいるが、生憎一夏は緊張すると反応が落ちる人種だった。というか、陰茎は一夏の支配下に置かれていた。当然だ。束の胸の方が真耶より大きい。一夏は直ぐに余裕を取り戻す。

冷静になった一夏は考える。真耶は『織斑一夏』の仮面に気づいていないに違いない。もし気づいていれば、いきなりあからさまな行動をとって、警戒される事態は避けたいはずだからだ。つまり真耶は、一夏のことをだたの男子だとみている。これは一夏にとって朗報であった。

考えてみればそうなのだ。周りの少女達は間者として育成されている。だからこそお互いが仮面を被っていると考える。しかし、『織斑一夏』はそうではない。『織斑一夏』自身は一般人であるはずなのだ。一夏の家の中で何が行われていたか、周囲は知ることはできない

はずなのだから。織斑家は、束によってあらゆる諜報から守られている。そう一夏は把握していた。

楽観はできない。しかし、一夏と周りの間者達とでは前提条件が違う。一夏は彼女達が演技をしていると知っているが、彼女達は一夏が演技をしているとは知らないはずなのだ。少なくとも、普通に考えれば。

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

自己紹介を終え、頭を下げる。周囲の視線が強くなったのを一夏は感じた。一夏の視線が外れたことを良いことに、まじまじと見つめる少女達。彼女達は知らないだろうが、一夏は視線に敏感だ。伊達に監視されて過ごしていない。

故に一夏の精神は安定したままだ。そもそも最悪の事態である勃起しての挨拶を回避した今の一夏に、隙はない。顔を上げて、周囲を見渡す。真耶の胸を見て束を思い出して恋しくなっていた一夏は、束の妹である箒を探す。自身の自己紹介に沈黙した場の雰囲気から逃れるべく旧友に助けを求める、そんな振りをして。

箒はすぐに見つかった。束譲りの白い肌に整った顔立ち。束は西洋的な装いを好むのに対し、箒は如何にもな和風少女ではある。艶のある黒髪は、色あせた白いリボンで一度纏めてから腰に流れている。背筋の良い、凛とした佇まい。動の束に静の箒。姉妹でも正反対に見える二人。

だが一夏には分かる。どれだけ性格が似ていなくても、好みが違っていても、箒は束の妹だ。箒の中に潜む束の面影、それは決して消えることはない。箒が『篠ノ之箒』として束を嫌う演技をいくらしたところで、二人の関係が切れることはないのだ。これが例え六年ぶりの再会であっても、一夏は箒の中に束を見ることができる。

束に会えないからせめて箒で。

そんな一夏の邪な心を見抜いたのか、箒はぷいと目を逸らした。

4

事の発端は、一時間目の授業中だった。
『織斑一夏』はＩＳに興味がない。そういう仮面を一夏は被ってきた。だからこそ、ＩＳに関する知識は乏しく、参考書も電話帳と間違えて捨てる。それが一夏の演じる『織斑一夏』だ。
そんな一夏のために放課後の特別授業が開かれることといなるのは、至極当然の流れだった。
「――――また放課後によろしくお願いします」
「ほ、放課後……放課後にふたりきりの教師と生徒……。あっ！　だ、ダメですよ、織斑くん――――」
授業中に淫乱教師と化した真耶の攻勢を、一夏は余裕をもって受け止める。上目遣いに近づく真耶だったが、思えば束の方が大胆に詰め寄って来た。パーソナルスペースに入り込まれると相手が誰であれ圧力を受ける。そのあたり、束は巧だった。一瞬で距離を詰め、圧を感じる前に離れる。一夏にとって真耶のそれは、捕食行動に見えつつあった。
「で、でも、織斑先生の弟さんだったら……」
このクラスの担任である千冬の前で、そう呟く副担任の真耶。余りにも攻め攻めな真耶に、一夏は思わず体を後ろに下げる。すると、一夏に向かっていたクラスの視線の中で、一際鋭くなるものがあることに気づいた。しかし流石にその持ち主は分からない。敵意を持つ相手ならば早めに把握したい一夏だったが、その正体が二時間目の休み時間に判明した。
「ちょっと、よろしくて？」
「へ？」
腰まで垂らした金髪をロールさせた、青い瞳の白人少女。イギリスの代表候補性、セシリア・オルコットだ。数少ない代表候補性の中でも有名人、十五歳の若さでイギリス大貴族の当主を務めるやり手だった。しかし『織斑一夏』はセシリアのことなど知らない。だから一夏は知らない振りをする。
「訊いてます？　お返事は？」
「あ、ああ。訊いてるけど……どういう要件だ？」

「まあ！　なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんではないかしら？」

セシリアは十二歳の時に両親を亡くして以来、たった一人で崩れかけた家を建て直した才女である。甘やかされて育った箱入り娘ではない。故にこの傲慢な態度は演技だと、一夏は判断する。勿論、クラスメイトは全員自国の使命を受けているのだから、演技は常にしている。それでも、態々嫌われるような性格を演じる必要はない。その上で見下すような態度をとるセシリアには、それ相応の目的があると一夏は考えた。

考えられる事は一つ、一夏を怒らせることだ。一夏の感情を高ぶらせて、何かを探ろうとしているのかも知れない。

だが恐れることはなかった。表面上怒りに駆られながらも、心を落ちるかせることなど、一夏にとって造作もないことだ。伊達に十年間、『織斑一夏』の仮面を被ってはいないのだ。

三時間目が始まってもセシリアの行動は続いた。

授業では再来週に行われるクラス対抗戦の代表を決めることとなり、一夏が当然のように周囲から推薦されたのだが、完全に色物枠として候補に挙げられた一夏に、セシリアが噛みついたのだ。

一夏の悪口から始まり、日本そのものにまで罵るセシリア。日本に存在するＩＳ学園で、クラスメイトの半数以上が日本人であるこの状況下で、イギリスを代表して来ているはずのセシリアが侮辱を続ける。

そこまでして得る物があるのか、一夏には疑問だったが、『織斑一夏』として口論に付き合わない訳にはいかない。最終的にセシリアから申し込まれた決闘を一夏が受ける形で、事態は収束した。

5

セシリアとの決闘を受けたことが良かったのか悪かったのか、一夏

には判断できなかった。相手が望んでいることなのだから、態々こちらが合わせてやる必要はない。しかし悔しいことに、場の主導権はセシリアが握っていた。『織斑一夏』の設定では、あの流れには逆らえない。強い意志を持つ人間の監視は厳しくなる。だからこそ『織斑一夏』は流されやすい人間であった。

「――――寮の部屋が決まりました」

一日の授業が終わり、放課後を迎えた一夏の前に、副担任の真耶がルームキーを携えてやって来た。後ろには担任の千冬もいる。一夏を遠目に観察していたクラスメイト達は、帰り支度をしながら意識を傾ける。

ＩＳ学園は外部からの支配を受けないという名目上、生徒は全員寮生活をすることとなっている。しかし実質女子高であるＩＳ学園には、男子生徒を受け入れる用意はなく、一夏には当分の自宅通学が言い渡されていた。

が、当然そうなることはない。今の一夏の身で通学することは危険であるし、一夏と女子生徒を同室に閉じ込めることができる機会を、各国が逃すわけもなかった。

「――――一カ月もすれば個室の方が用意できますから、しばらくは相部屋で我慢してください」

一夏の耳元でそう囁く真耶。自身の膨らみを一夏に当てることも忘れない。今日一番一夏に接近した真耶は、自身の首筋の香りを一夏に嗅がせる。それを避けることはできない。なぜなら可笑しくない行為だからだ。話は一夏のプライベートに関わることなのだから、耳打ちになるのは当たり前。一夏より背の低い真耶が一夏の耳に口を当てようとしたら、胸が前に突き出されて一夏の胸板に当たるのも当たり前。視覚と触覚と嗅覚の三点攻めだが、一夏は勃起しない。一夏は耐えられる男だった。

真耶に慣れてきたというのもあるが、真耶の後ろに千冬がいるというのも大きかった。千冬は『最強』として、束に唯一同等と認められた存在だ。守られるだけの一夏とは違う、束と並び立つことができる『最強』。一夏の目指す場所へ既に到達している千冬の前でこそ、情け

ない姿を晒すなんてしたくはない。動の束とも静の箒とも違う、静かなる動。件の三人の中で、唯一束と対等な人間。首裏で無造作に縛った黒髪が見せるように、固い意志を持つ女性。それが、一夏が将来超えなくてはならない相手。

だからこそ、千冬の前では失態を犯したくない。

「――――ちゃんと寮に帰るんですよ。道草くっちゃダメですよ」

去り際にそう告げた真耶は、眼鏡の奥で一夏を笑っているかのようだった。

まるで見透かされているかのように感じた一夏は、足早に教室から抜け出した。周囲の視線が突き刺さるが、鈍感を装い無視を決め込む。今は一刻でも早くこの場から離れたかったのだ。少しでも真耶の面影がない場所に行きたかった。

廊下を進む一夏に向けて、学校中から視線が集まる。だがその程度で一夏は臆さない。これまで一夏が浴びてきた見えない監視の目に比べたら、『女子高生』という仮面を通して送られる視線など、気にする程でもなかった。少なくとも今の一夏にとって、頭の中を占める問題は真耶だ。

歩きながら心中で真耶を罵倒する。なんなんだあの女は。盛りのついた牛か。まったく千冬ねぇの前でまで攻めてくるなんて。

そうだ、と一夏は気づいた。真耶は千冬の前で堂々と一夏を誘惑していた。あの『最強』の前で敵対行動をしていたのだ。

末恐ろしいものを改めて感じた一夏は、与えられた１０２５号室へと逃げるように入って行く。同室の相手は気にする必要はない。十中八九、箒であると確信しているからだ。件の三人の一人である箒であるからこそ、一夏の同室の相手として世界は一応の納得を見せる。箒以外の生徒ならば、必ず各国に軋轢が生まれてしまう。千冬と同室にしては、各国の要求に一応は応えたという建前が成り立たなくなってしまう。だからこそ、先に１０２５室でシャワーを浴びている女子生徒は箒でしかあり得ない、と一夏は断定できる。

このＩＳ学園において一夏の数少ない味方である箒。束の妹にして、『織斑一夏』の仮面を知る者。ＩＳが世に出てから四年間、共に世

界を欺くことを誓い合った仲間だ。六年前に別れてから今日まで再び会うことはなかったが、それでも箒は今も変わらず仲間だと、一夏は知っていた。

引き締まりながらも女性としての柔らかさを感じさせる体に、腰まで伸ばした真っすぐな黒髪。やはり束の面影がある、そう思う一夏に向かって、シャワー室から出てきたタオル一枚姿の箒は木刀を振りかざした。

「うおおっ!?」

命の危険を感じながら、『篠ノ之箒』の照れ隠しを回避する一夏。自室でも『篠ノ之箒』の仮面を外さない箒に、一夏は一瞬気を緩めそうになった自分を恥じる。

織斑家や篠ノ之家と同様に、この部屋には監視の目はないと考えられた。ＩＳ学園においての、一夏と箒の家である１０２５室。その場所に手を出せば『災厄』を招く事態になることは、過去の経験から世界は知っているはずだったからだ。

だがそれは、推測でしかない。織斑家と篠ノ之家での安全は『天才』によって守られていた。しかしこの１０２５室の安全においては、『天才』の保証は得られていないのだ。それだけではない。知らぬ間に、一夏に盗聴器の類が仕込まれている可能性もあるであろう。織斑家と篠ノ之家の中では傍聴ができないようになっていたため、一夏の意識から抜けかかっていた。

けれども、箒は違った。ここが敵地であることを忘れずに、『篠ノ之箒』を演じ続ける。１０２５室が「外と同じ」だと意識させるために、裸を見た一夏への成敗に見せかけて、部屋の扉に穴を空けてみせた。

『織斑一夏』として『篠ノ之箒』に部屋から放り出された一夏は、そんな箒と自身を比べて己を悔いた。真耶に怯えて束の影に隠れようとしていたことを恥じた。

「……箒、箒さん、部屋に入れてください――――」

『織斑一夏』としてだけではなく、織斑一夏として、二重の意味で箒に謝罪する。前者は箒の柔肌を覗いた無礼を、後者は腑抜けていた己の心を。

騒ぎに気付いて集まり始めた野次馬に囲まれながら数分経ち、ようやく部屋への入室を許可された一夏。だが、箒の表情は硬い。一夏には分かった。これは『篠ノ之箒』としてだけではなく、箒自身が一夏に対して怒っている。

そこから始まる痴話喧嘩。『織斑一夏』の『篠ノ之箒』のショーは、開け放たれた部屋の扉から、二人を観察する少女達に向かって公演される。

木刀で一夏を叩き切ろうとする箒を、一夏が白刃取りで止める。箒は上から体重をかけ、一夏を押し倒す形になった。

箒の顔が一夏に迫る。人形のように綺麗な顔立ち。束を思い起こさせる妖艶な口元。下から見上げる豊かな双丘。そこに包まれる形になる一夏。あの試験会場でＩＳを通して見た束の幻想を、一夏は思い出した。

あぁ束さん、と一夏は思う。情けない自身を恥じながら、束に誓う。いつか必ず、束を守れる騎士になることを。白騎士を超える、本当の騎士に。

「……一夏」

茶番を終え部屋の扉を閉めた後、二人きりの部屋の中で箒が告げる。

「なんて顔をしているんだ、お前は……」

箒の心底呆れたその声に、一夏は首を捻るのだった。

【承】クラス内人間関係決定戦！

０

三年前、セシリア・オルコットという名の少女を悲劇が襲った。

両親の突然の死。

それが陰謀いよるものなのか、事故によるものなのか、当時はイギリスのお茶の間を騒がしたりもしたが、セシリアにとってはどちらも同じこと。十二歳の身空で、イギリス大貴族の当主を務める。両親の死の真相がどうであれ、その事実は変わらない。セシリアはある日突然、闘争の世界に放り込まれてしまった。

オルコット家が取り潰されればその財産は国の物になるが、セシリアと結婚すれば己が物にできる。両親という最も大きな後ろ盾を亡くした十二歳の少女に、欲に飢えた男達が獣となって襲い掛かるのは当然。結局の所、上流階級の力の持ち主は男だ。ＩＳが現れようとも、それは変わらなかった。

だからこそ、オルコット家がとっていた女尊男卑という方針はセシリアの身を守ることに役立った。自軍派閥の代表としてセシリアが君臨することを、スムーズに行わせた。お飾りのトップではなく、実権を握る当主として。今だからこそセシリアには分かる。女尊男卑を率先していた両親の意図を。全ては、オルコット家の跡取りであるセシリアのためだったのだ。

セシリアの父は母に対して頭が上がらなかった。セシリアの記憶ではそうなっている。当時は既にＩＳが誕生していた。いずれ生じるであろう女尊男卑の風潮にかこつけて、セシリアへ権力が問題なく流れるように、彼女の両親は芝居を打っていたのである。

だがそれは中途半端に終わってしまった。彼らの死後、派閥を纏めること自体には成功したセシリアだったが、オルコット家の力は急激に弱体化してしまったのだ。女尊男卑が通じたのは身内の中でだけ。貴族社会では今だ男の力が強かった。

結局、当主を引き継いだ直後のセシリアが貴族社会で生き抜くためには、自身の女を使うしかなかった。といっても当時十二歳の少女

だ。春を売るわけではない。だが、自身の少女としての魅力を全面に引き出し、男達の顔色を窺う。オルコット家の建て直しが終わるまでは、セシリアは必死に耐えた。オルコット家を食い物にしようとする男達に媚を売るのだ。女尊男卑の中で育ってきたセシリアにとって、屈辱以外の何物でもない。

十五歳となった現在、セシリアは力を付けた。たった三年でオルコット家を復興させ、イギリス貴族界でも有数の地位を確立した。だが、かつての恥辱を拭えはしない。女を使って男を相手する。その行為がかつての自分を思い起こさせる。両親の死に絶望し、彼らの残した力によって守られるしかなかった、自身の惨めさを。禿鷹のように群がる男達に笑みを浮かべるしかなかった、自身の苛立ちを。

だから。

ＩＳ学園入学初日から織斑一夏（おりむらいちか）に女を使う山田真耶（やまだまや）を、セシリアは陰から睨みつけたのだ。

1

「そう！　エリートなのですわ！」

何と高飛車な女なのだろうか。自分自身で内心、『セシリア・オルコット』のキャラクターに苦笑いしながら、セシリアは一夏を挑発した。

狙いはただ一つ、ＩＳ試合の一騎打ちで、一夏がセシリアに感情を乗せること。ただの一騎打ちではセシリアの目的は果たせない。試合時に一夏が身も心もＩＳと一体化させて、セシリアと接触する必要があった。

遠隔無線誘導兵器搭載型ＩＳを所有するイギリスのみが持つ、とあるアドバンテージ。否、恐らくはセシリアしか気づいていない、彼女に渡されたＩＳ『ブルー・ティアーズ』の真の切り札。実践した経験は無いものの、セシリアが理論立てたそれは、相手の意識に干渉できると考えられた。しかし有効なのは一度だけ。故にその存在が万が一にも相手に気づかれる前に、実行する必要がある。

全ては、織斑一夏を通して篠ノ之束（しののたばね）へと近づくために。

「――――わたくしは優秀ですから、あなたのような人間にも優しくしてあげますわよ」

調査報告書から推測される一夏の感情を逆なでするように、傲慢な態度をとるセシリア。『ブルー・ティアーズ』による精神干渉には、相手の感情が高ぶっている程有効と推定される。そのためにセシリアは入学初日から一夏へと嫌味を口にしていた。

一見すればセシリアのクラス内での立場が危うくなるような行動。イギリスのＩＳ代表候補性のセシリアが発言するには危険すぎる内容であったが、用意周到なセシリアには問題にならなかった。

まず、いくらＩＳ学園に所属する者は、如何なる組織の制約も受けない。つまり、いくらセシリアが問題発言をしようとも、それはセシリア・オルコットという若干十五歳の少女の世迷言であり、イギリスという国家組織とは何の関係もないと判断される。

もちろん、実際のとことＩＳ学園の生徒はそれぞれの母国に縛られており、学園内で大きすぎる問題を起こせば国際問題となる。しかし、たかが暴言の一つや二つくらいでは、個人の問題として学園内で処理されるのだ。そしてそのことを公にした者は、国際法違反の罪に問われることになる。お互いの母国に報告はされるであろうが、その発言を本気にすることはないし、国際政治の場で上げ足取りに使うこともない。ただ、そういう事実があったというだけのことだ。

そしてそもそも、セシリアは一夏を侮辱することをクラス内に通達していた。「世界で唯一の男性ＩＳ操縦者である、織斑一夏の実力を知るため」という免罪符のもと、セシリアの行動は許容される。

また今回の件により、一年一組のヒエラルキーのトップには、自然とセシリアが座ることになる。行動を起こしたという実績と、国家代表候補生という肩書。この二つがＩＳ学園におけるセシリアの立場を強固な物にする。

当然、全ては裏の話。表向きは一夏を中心としたクラス内の人間関係が構築されるであろう。しかし一夏は彼女達にとって攻略対象なのだ。一夏と箒を除いた裏の人間関係は、セシリアを中心とすること

となる。
だからこそセシリアは、クラス中の視線が集中する中でも、『セシリア・オルコット』として振舞うことができた。
「――――何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」
決まった。セシリアは人知れず笑みを浮かべる。明らかに『セシリア・オルコット』が一夏のことを見下していると伝わったはずだ。着火剤は十分。後は油を注ぐだけで、火は燃え上がるに違いなかった。
「入試って、あれか？　ＩＳを動かして戦うやつ？」
「それ以外に入試などありませんわ」
「あれ？　俺も倒したぞ、教官」
は……？
一夏の爆弾発言に、セシリアと『セシリア・オルコット』の時間が止まった。
演技無しに目を見開いて、一夏を呆と見つめてしまう。
何を馬鹿なことを。それがセシリアの心の第一声だった。
セシリアはイギリスのＩＳ国家代表候補生だ。クラスの中でも、否、学園の三学年の中でも有数の実力を持っていると自負している。そもそも国家代表候補生クラスの人間が、本来ＩＳ学園に在籍することはまずあり得ない。所詮、ＩＳ学園は偽りの教育機関。セシリアを含め特別な事情がない限り、国家代表候補生が入学することはない。表向き競技として普及しているＩＳだが、その本質は兵器だ。その操縦者を、態々他国の目がある場所で育てる利点はない。そもそも国家代表候補生にとって、今更ＩＳ学園で習うことなどなかった。それほどまでに、実力が隔絶しているのだ。国家代表候補生という存在は。
その内の一人であるセシリアがそれなりに苦労した、ＩＳ学園の教官との対決。流石に一夏の相手とセシリアの相手に、大きな実力差があったとは考えられない。そもそも一夏はＩＳの訓練を受けていないはずである。そのど素人がＩＳ学園の教官を倒した？　特別に用意された専用機ではなく、入試用の平凡な訓練機で？
あり得ない。あり得るはずがない。セシリアの口から言葉が飛び

出しそうになる。
セシリアは曲がりなりにもイギリスのＩＳ国家代表候補生だ。セシリアがＩＳを始めた理由は、たまたまＩＳの適正があったからと、女尊男卑を掲げるオルコット家にとって都合が良かったから。イギリス大貴族としての活動がセシリアの本業ではあったが、ＩＳの訓練にも力を入れてきた。国家代表候補生という立場は、純粋に実力で手に入れた物だ。現実にはイギリス国内において、遠隔無線誘導兵器の操縦という点で競合相手に負けている。そこをオルコット家の復興に反発する派閥に突かれて、ＩＳ学園に島流しにされて来たという経歴がある。それでも、セシリアの実力は並大抵のものではなかった。
だからこそ、一夏の異常性が分かる。織斑一夏がＩＳ学園の教官に勝利するためには、それこそ神に愛された才能が無ければならない。
僅かに芽生えた嫉妬。
もちろん、束がＩＳをハッキングして一夏を勝たせた可能性もある。しかし、安易にそれをするだろうか。ＩＳへのハッキングは、これまで束と世界が築き上げた均衡状態を崩すことになる。今更そんな事をするとは考えられなかった。
そして何より重大なのは、一夏が勝利していたという情報をセシリアが把握していなかったことだ。世界最初の唯一の男性ＩＳ操縦者である織斑一夏に、素人状態で国家レベルのベテランに勝つ程の才能がある。そんなことが分かれば、流石に話が広まるはずであった。つまり、誰かが意図的に情報の拡散を封じ込めたに違いない。ＩＳ学園ではない別の何かが。
束が件の三人を『特別』にしようとしていることが世界的に見ても明らかである。故に、一夏が『特別』と認められる事態を『天災』が求めている、と推測することは容易い。今現在ＩＳ学園が束の意に背くことをするとは考えられなかった。黒幕は、ＩＳ学園に対して『天災』と抗う選択肢を取らせることができる何か。果たしてそんな存在が実在するのか。少なくともセシリアは知らない。
「わ、わたくしだけと聞きましたが？」
思わず口に出してしまい、セシリアは焦る。一夏の試験結果を知っ

ていたと装い、「教官を倒した者同士、実力を確かめ合う」という流れにすることもでたはずだった。だがセシリアは、自身の情報収集力不足を晒してしまった。これは、セシリアのＩＳ学園での優位性を揺るがすことに繋がるかもしれない。

だが言葉にしてしまったものは仕方がなかった。周囲の様子に注意を払いながら、セシリアは一夏への挑発を続けた。

直ぐに二限目の休み時間が終わり、三限目に入る。

千冬の掲示したクラス代表決定の話を利用して、セシリアは一夏を煽る。周りのクラスメイト達も事前の根回し通り、一夏をクラス代表に推薦することで、『セシリア・オルコット』がヒステリーを起こす土台を作る。

こうして当初の計画通り、激怒した一夏とのＩＳ一騎打ちを、自然な形で進めることができた。

2

元々セシリアがＩＳ学園に送られた理由は、遠隔無線誘導兵器の操縦実力が競合相手と劣っている事を政敵に突かれたことによる、島流しであった。一時的にでもセシリアをイギリスから国外へと追いやることで、オルコット家のこれ以上の躍進を阻害しようとしたのだ。

そんなセシリアの立場は、一夏のＩＳ学園入学という事態によって反転した。一夏と同じクラスに、自国の国家代表候補生が所属することができたのだ。一夏のＩＳ指導役という立場に収まり、あわよくば男女の関係になることが、本国からセシリアに望まれていた。一夏や箒がＩＳの訓練をしていたという情報は確認されていないため、国家代表候補生であるセシリアが問題無く指導役になるであろう。イギリスだけでなくセシリア自身もそう思っていた。『セシリア・オルコット』の一夏を下に見た態度も、一度喧嘩することで通常よりも仲を深める布石でもあったのだ。一夏に関するプロファイリングから、十分勝算が見込めると考えられていた。実際には、一夏の「教官倒した」発言で問題が起きかけたのだが。

現状、セシリアの計画に問題はない。クラス代表決定の場で、一夏の実力を測る。弱ければ当初の想定通り指導役に収まれば良い。強くても、そんな一夏と対等に競い合える人間はセシリアだけだ。互いに指導し合う仲になれば良い。

そしてもう一つ、『ブルー・ティアーズ』を利用した一夏への意識介入。これだけは完全にセシリアの独断だった。故にこれで得られた情報は全てセシリアが独占するつもりであるし、そもそもイギリス本国は『ブルー・ティアーズ』にそのような力があることは知らない。遠隔無線誘導兵器を利用した方法であるものの、セシリアの例の競合相手も気づいていないはずだった。何の躊躇もなしに遠隔無線誘導兵器に身を委ねるような人間が、気づくはずもない事なのだから。

目下の問題は、一夏がセシリア以外の少女と先に関係を持ってしまう事だった。抜け駆けを警戒する必要があったのだ。一年一組を一応は掌握しているとはいえ、一時的な物に過ぎない。そもそもお互い潜在的な敵対関係にあるのだから、油断は許されなかった。また、授業以外ではＩＳ学園の全ての生徒が一夏を狙ってくる。その全てを抑える力など、セシリアに有りもしなかった。

一夏は直ぐに鼻の下を伸ばすであろう。正直、セシリアはそう思っていた。流石に一週間で誰かと関係を持つような阿呆ではないだろうが、それこそ勃起の一つや二つはするだろうと。

だが、一週間一夏を観察したものの、その傾向は見られなかった。勃起とまではいかなくても、僅かな陰茎の反応さえ確認することはなかった。

一夏が男性として死んでいるという仮説が浮かびそうな物であるが、一夏の性欲を押し込めている原因は直ぐに判明した。

篠ノ之箒（しののほうき）である。箒が一夏の性欲を発散させていた。

といっても、夜な夜な箒が一夏と性交しているのではない。箒は一夏を運動させて疲労困憊に陥らせることで、性欲が湧く余力を奪っていたのだ。クラス代表決定戦に向けて特訓するという名目の元、一夏を剣道場で扱き抜く箒。偶然か、はたまた狙ってなのか、箒は毎日三時間、一夏の体力と気力を奪い続けた。日に日に窶れていく一夏を見

て、セシリアは思わず同情する。半面、箒の顔は輝いていた。一夏と過ごす三時間が余程楽しいのか、初日の機嫌の悪さは何処にもなかった。

このまま一夏の性欲が消され続けられると問題であったが、そう長くは続かないであろうことも明白であった。お題目である「打倒セシリア」の結果がどうあれ、二人の決闘が済めば一夏のオーバーワークも終わる。二人の意思に関わらず、周囲が全力で止める。

決闘の日までの一週間、一夏は剣道場に通い詰めていた。確かに、現実での戦闘経験はＩＳにも反映できる。一夏は付け焼刃でＩＳを習うより、戦闘経験を蓄えることを優先したのかもしれない。いや、もしかしたらＩＳでの練習など必要ないということか。何せ、素人の癖に入試で教官倒したというのだから。

そんな事を考えながら、セシリアは一週間を過ごした。思えば一夏の事ばかり考えていたような気がする。当然だ。これからセシリアは一夏を通して束の秘密を覗こうというのだ。一夏が何か知っていたらという前提ではあるが。

仮に一夏が無知であったとしても、精神に入り込めば何かが分かるはず。それこそ、一夏自身の秘密でも良い。

そう自分を納得させて、セシリアは一夏との決闘の日を迎える。

実は『ブルー・ティアーズ』による一夏への精神汚染。それ自体も目的ではあるが、三つ目の目的のための手段でもあった。

今回の計画。一つ目の目的は、一夏とセシリアの関係性を強固な物にすること。劇的な出会いと体験を演出することで、二人の間に邪魔が入らないようにする。

二つ目は、一夏の精神に探りを入れること。ＩＳ『ブルー・ティアーズ』の遠隔無線誘導兵器（ブルー・ティアーズ）を用いる事で、それを行う。

そして最後の三つ目。それは、セシリアが真の意味で遠隔無線誘導兵器を使えるようになること。これまで忌避してきたそれを、超えなくてはならない。セシリアが元々ＩＳ学園に飛ばされる切っ掛けとなったのは、遠隔無線誘導兵器を扱いきれなかったから。競合相手が踏み込んだ『領域』を、セシリアが恐れたから。だからそれを超える

ために、一夏を免罪符にして、セシリアは『向こう側』へと至る。

3

青の雫、『ブルー・ティアーズ』。その名の通り全身を薄い青に染められたこのＩＳは、四枚の羽根のような装甲を背負い、腰にはスカート状の装甲を持つ。それこそが、遠隔無線誘導兵器（ブルー・ティアーズ）と呼ばれる自立起動兵器だ。

青の装甲を全身に纏わせるセシリアの前に、白の甲冑を被った一夏が現れる。『白式（びゃくしき）』。それが日本が一夏に与えたＩＳ。

一目見てセシリアは理解した。このＩＳは束の手が入っていると。何故なら、余りにも似ているからだ。十年前、世界に最初に現れたＩＳ、『白騎士』に。織斑千冬（おりむらちふゆ）が乗っていたとされるＩＳを模したＩＳに、織斑一夏が乗る。それは笑いたくなるほど出来すぎていた。

セシリアと一夏が３０メートル程距離を挟んで、空中で対峙する。

ＩＳの試合を行うためのアリーナ・ステージは直径２００メートル。この中で三次元的に飛行するＩＳ同士が攻撃し合い、互いのエネルギーを削る。ＩＳがダメージを受ける事で発生する『絶対防御』と呼ばれる防御システム。これの発生に必要なシールドエネルギーを消費させ、相手のエネルギーを先に０にした方が勝つ。これが競技としてのＩＳだった。

改めてセシリアは目の前の一夏と『白式』を見る。

束の手が入ったと考えられるＩＳ。もしかしたら、遠隔無線誘導兵器（ブルー・ティアーズ）による干渉を対策しているかもしれない。セシリアにそんな不安が生じる。もしそうであれば、束はセシリアの思惑を感知していたことになる。そしてセシリアが実際に行動を起こせば、『災厄』を引き起こすことになるかもしれない。

セシリアは想像する。自分が所属不明のＩＳに襲われ、無残にも殺されるところを。オルコット家が破壊され、塵となす様子を。

いや、大丈夫だ。セシリアは自分を落ち着かせる。二年前、『災厄』の怒りに触れたとされる中国の少女は、今も無事を確認している。あ

の少女は日本を離れる事になったが、それだけだ。天気が陰りだしている気がするが、それだけだ。

そもそも、今の段階で束が気づいていないとしても、セシリアが実行すればバレる可能性は高くなる。その上でセシリアは計画を立てたのだ。『災厄』を呼び起こさないと判断して。

何故ならこれは、一夏を悪意で害する訳ではないから。意識介入と言っているが、ＩＳの構造状、仕方のない事なのだから。今は誰も気づいていないだけで、いずれ誰かの知るところになるのだから。

束が気づいているのならば、それを放置している時点で問題ない。束が後から気づいたとしても、そういう理不尽に怒ることは今までない。だから大丈夫。

セシリアは腰に手を当てて、心を落ち着かせる。

いつかは打たなければならない博打。いつかは越えなければならない壁。ならばここで、セシリアは前へ進む。

今までそうやって、セシリア・オルコットは生きてきたのだから。

4

始まってみれば、呆気ないものだった。

織斑一夏の実力は、素人に毛が生えた程度のものでしかなかった。

確かに、反射神経には目を見張るものがある。しかし、ＩＳ乗りとしてはセシリア・オルコットの足元にも及ばない。入学試験で教官を倒したという話は、何かの事故だと考えられた。

試合開始早々、自身の銃器、六十七口径特殊レーザーライフル『スターライトｍｋⅢ』での狙撃結果を以て、セシリアはそう判断した。一夏の動きは拙いの一言。とてもセシリアに並ぶものではない。幾ら試合当日に届いたＩＳといっても、既に機体を搭乗者専用に調整する一次以降（ファースト・シフト）によって最適化（フィッティング）は終わっているはずである。セシリアと一夏がアリーナに入ってから試合開始まで、それくらいの時間は優にあった。まさか初期設定のＩＳを使うはずもない。それは素人がいきなり飛行機を飛ばす様なものだ。馬鹿の所業である。

とにかく、一夏は大したことなかった。それでも、セシリアは簡単に一夏を負かすわけにはいかない。一夏には感情を乗せて、セシリアに向かって来てもらわなくてはならないのだ。そこで、一夏にも避けられるように遅延攻撃を続けた。

四機の遠隔無線誘導兵器（ブルー・ティアーズ）から放たれるけん制のレーザーと、ライフルから撃ち抜かれる本命のレーザー。死角から放たれるけん制に意識を奪わせることで、本命を確実に当てる。それがＩＳ『ブルー・ティアーズ』。近接格闘装備である片刃のブレードしか持たない一夏は、約三十分の間、いい様に遊ばれていた。

「では、閉幕（フィナーレ）と参りましょう」

ＩＳコアによるデータ通信ネットワーク、その内のプライベートチャンネルを利用して、セシリアが一夏へ告げた。

さっきから一夏が遠隔無線誘導兵器（ブルー・ティアーズ）の内、四機飛ばしているビットの位置に気を配っていることを、セシリアは気づいていた。一夏にも分かるように、わざと意識の死角からしか狙わなかったのだ。それを永遠と続けていれば、馬鹿でも分かる。分からなくても、ＩＳが勝手に学習する。

そろそろ頃合いだろう。そう読んだセシリアが次の展開へと試合を進める。行動しなければ終わる、一夏にそう思わせるために、セシリアは宣告したのだ。

そして、試合は動いた。

セシリアによる脅しの一撃を防いだ一夏は、その流れのままビットを一つ破壊する。

「この兵器は毎回お前が命令を送らないと動かない！　しかも――――」

調子に乗った一夏が、セシリアが繋いだチャンネルに意識を流す。

「その時、お前はそれ以外の攻撃をできない。制御に意識を集中させているからだ。そうだろ？」

それは事実だった。しかし間違ってもいた。

遠隔無線誘導兵器に意識を集中させているのではない。意識を送っていないからこそ、セシリアは『意識的に』遠隔無線誘導兵器を

操縦しないといけない。
遠隔無線誘導兵器は人間の意識を喰らう。元々、ＩＳには搭乗者の意識を表面的に読み取る機能が備わっていた。しかし、遠隔無線誘導兵器は求める次元が違う。操縦者の意識を、認識を、自我を、その全てを要求する。そうすることで、遠隔無線誘導兵器は本来の力を発揮する。
だがそれは、ＩＳへと己の全てを委ねる事。篠ノ之束に屈服することに他ならない。
束はＩＳコアを操作できる可能性がある。その中でＩＳに自身の自我を移す。それはとても恐ろしいことだと、セシリアは思う。
しかし、遠隔無線誘導兵器が操縦者に自我を求めていることを知る者は、セシリアしかいない。それは言葉にできない感覚であるし、セシリアの競合相手は無意識にそれを成していた。
だからセシリアは負けた。イギリス本国において、遠隔無線誘導兵器の担う人材として、負けた。
けれども今ここで、セシリアはそれを行う。
ＩＳに。『ブルー・ティアーズ』に。遠隔無線誘導兵器に。己の全てを。意識を。認識を。自我を。注ぎ込む。
但し、一夏のＩＳと、データ通信ネットワークを繋いだままでだ。
ＩＳコアには意識があると言う。
一次移行（ファースト・シフト）の先、二次以降（セカンド・シフト）に至った者達の間で、まことしやかに流れるそれ。
心像世界でのみ、触れ合うことができるだとか。
ＩＳコア同士は、データ通信ネットワークで繋がる。ＩＳコアの意識は繋がる。
セシリアの意識はＩＳコアと繋がる。『ブルー・ティアーズ』と繋がる。
『ブルー・ティアーズ』は『白式』と繋がる。セシリアは『白式』と繋がる。
一夏が『白式』と繋がるのならば、セシリアは一夏と繋がる。
だから、一夏の意識をＩＳコアのネットワークに乗せる。プライ

ベートチャンネルで『ブルー・ティアーズ』にだけ乗せる。
一夏の認識をセシリアに向ける。『ブルー・ティアーズ』に向ける。
一夏の自我を『白式』に委ねさせる。セシリアと自我を混ぜる。
全ては机上の空論。
とんでも理論。
だが、セシリアには分かる。感じる。
この企みは成功する。
「――――かかりましたわ」
一夏がセシリアを倒すべく、接近する。四機あったビットは、全て破壊された。
一夏と『白式』が一つになる。
その瞬間、意識が溶ける。
認識が溶ける。
自我が溶ける。
セシリアが溶ける。
一夏を道連れに。
「おあいにく様、ブルー・ティアーズは六機あってよ！」
腰から撃ち出された、二機の遠隔無線誘導兵器（ブルー・ティアーズ）を起点にして。

5

セシリアは一夏を見ていた。
セシリアは一夏だった。
一夏である自分を、セシリアは見ていた。
これは一夏の記憶。セシリアはそれを感覚的に理解した。
一夏は箒を見ていた。
小学生の頃、剣道場で竹刀を撃ち合う二人。決して折れることのない箒。そこに束と同じ意思の固さを感じる一夏。一夏は束を見ていた。
重要人保護ポログラムによって離れ離れになる二人。涙を流さない箒。そこに束と同じ前へ向かう強さを感じる一夏。一夏は束を見ていた。

ＩＳ学園の教室で再会する二人。女らしく成長した箒。そこに束と同じ尊さを感じる一夏。一夏は束を見ていた。
思わずセシリアは笑ってしまった。これでは箒があんまりだと。
それでも一夏の記憶は続く。
一夏は真耶を見ていた。母性を感じさせる真耶。そこに束と同じ安堵を感じる一夏。一夏は束を見ていた。
一夏はクラスメイトを見ていた。一夏は束を見ていた。
一夏は道行く人を見ていた。一夏は束を見ていた。
一夏はテレビに映る人を見ていた。一夏は束を見ていた。
一夏はＩＳを見ていた。一夏は束を見ていた。
一夏はセシリアを見ていた。一夏は束を見ていた。
一夏は――――――束を見ていた。
一夏は束を見ていた。
一夏は束を見ていた。
一夏は束を見ていた。
一夏は、束しか見ていなかった。
セシリアに悪寒が走る。気持ち悪い。目に映る全てから束が見える。それでも、一夏は束を見ていた。
豊かな胸を持ち、屈託ない笑みを浮かべる女。エプロンをつけ、絵本の中から飛び出してきたかのような非現実的な女。ウサミミを付けた、長い黒髪の女。優しい眼差しで、全てを包み込む女。
セシリアは、女に抱きしめられる。
柔らかく程よい肉付きで、セシリアを覆う女。
思わず跳ね除けるセシリア。
触れたのは弾力のある脂肪ではなく、固い鍛えられたものだった。
自身を抱く腕を見るセシリア。それは令嬢のものではなく、引き締まっていた。
頭に当たっていた胸は、いつの間にか触れる程度になっていた。
恐る恐る顔を上げるセシリア。
そこにいたのは束ではなかった。
そこにいたのは――――

6

意識が戻ったセシリアの先には、白の騎士がいた。
恐らくは『白式』。姿が変化し、これまでの角ばった装甲に丸みを帯び、より女性的に近づいたＩＳ。
動揺するセシリアと平然とした一夏。
恐らく、先ほどの事を一夏は気づいていない。
セシリアが一夏の中で見た物を、一夏は知らない。
「ま、まさか……一次移行（ファースト・シフト）!?　あ、あなた、今まで初期設定だけの機体で戦っていたって言うの!?」
違う。そうじゃない。
セシリアが言いたかったのはそれではない。
何とかあの悍ましい光景を口にしようとする。だが出てくるのは、『セシリア・オルコット』としての台詞だけ。
「――――俺の家族を守る」
「……は?　あなた、何を言って――――」
何を言っている。
お前に家族などいない。
お前にあるのは、ただ――――
「とりあえずは、千冬姉の名前を守るさ！」
叫びと共に振り下ろされる一刀。狼狽える自身を切り裂くように迫り来るそれを、セシリアは呆然と見つめる。
一夏は知らないのだ。だからそんな台詞が言えるのだ。
セシリアは知ってしまった。だからこんな決意は聞くに耐えない。
それでも。
セシリアは一夏を止める術を持たない。